読売 教育ネットワーク

社会はまるごと学校――
すべての大人が先生です

出前授業で新聞を読む宮城県気仙沼高の生徒たち（2・3面へ）

巻頭特集 テーマ幅広く、講師陣も充実
記者による出前授業 新聞@スクール 2・3

異見交論 アクセス好調「国立大学法人化は失敗だったのか」 4・5

わたしたちの学校の魅力、新聞で伝えたい 東京・葛飾区立柴又小 6

土曜サロン90回 広がるNIEの取り組み 7

お知らせ・短信 8　リレーエッセー 米ボウディン大学「アドベンチャーだらけの教育」 9

2018.6
Vol.42

新聞@スクール

テーマ幅広く、講師陣も充実

記者による出前授業　新聞@スクール

読売新聞の記者が講師を務める出前授業への参加校が増えている。教室で新聞を役立ててもらおうと読売新聞は昨年10月に「新聞@スクール」の取り組みをスタート。取材の最前線を統括する地方総支局長が授業に出向く機会が増え講師陣が充実。授業のテーマも「新聞を楽しく読もう」から「メディアリテラシー（情報活用能力）」まで、学校現場からの要望に応じてバリエーションが広がっている。

新聞の読み方、取材方法などテーマに

宮城県気仙沼市の気仙沼高校で5月下旬に行われた出前授業では、読売新聞東北総局の小野一馬総局長＝現・東京本社記者塾（※）事務局長＝が講師を務めた。小野総局長は「ニュースをどう報じるか　新聞記者のアプローチ」と題して、新聞の読み方や記者の取材方法などについて話した。

地域課題を研究する1、2年生約280人が参加。小野総局長は、当日の朝刊に掲載されているアメリカンフットボールの危険タックル問題の記事を取り上げ、1面や社会面などで詳細に報じられている内容を解説した。

その後、東日本大震災から7年を前に全国版に掲載した連載を題材に新聞記者の取材方法を紹介。「現場を歩くと発見がある。自分の目で見ることが大事だ」と呼びかけた。

生徒らはこまめにメモをとり、積極的に質問をしていた。小野総局長は授業の最後に、「毎日様々な情報が載っており、考えるきっかけになる。新聞を読む習慣を身につけてほしい」と結んだ。

2年の佐藤道（みち）さんは「新聞は難しいと思っていたが、面白い記事もあった。同じ出来事が何面にも分けて細かく書かれており、色々な見方を知ることができます」と話していた。

※記者塾＝読売新聞社に入社したばかりの新人記者の研修をはじめ、若手から中堅、ベテランまでの記者教育を担当している

人との出会い 多くを学んで

小野一馬
東北総局長

今回の出前授業は、地域が抱える課題の研究に取り組む生徒たちに、新聞記者の取材のノウハウを学んでもらうのが狙いでした。記者がどうやって取材や紙面の計画を決め、記事を書いているのかを紹介すると、生徒たちは熱心にメモをとりながら聞いてくれました。

授業の後も「インタビューの時はどう話しかけたらいいか」「アンケートを行う時に注意することは」と具体的な質問を受けました。1年がかりで地域研究に取り組む生徒たち。これから多くの人に出会い、多くのことを学ぶことと思います。生徒たちの研究発表を見てみたい。そう感じた出前授業でした。

気仙沼高校で授業する小野総局長

増える情報リテラシーの授業

読売新聞記者による出前授業は、2016年は全国で106件だったが、昨年は179件に増えた。今年1月から5月までは96件で、昨年の同じ時期（41件）の倍以上になっている。授業のテーマとして学校から要望が多いのは▽新聞の読み方▽キャリア教育（記者の仕事・新聞社の役割）▽新聞作り・文章の書き方・取材のまとめ方―など。最近は、フェイク（偽）ニュースが注目を集めたり、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）がらみの犯罪が起きたりしていることもあって、メディアリテラシー（新聞、テレビ、インターネットなど様々な媒体から発信される情報を読み取り、活用する力）についての授業も増えている。

6月18日に起きた大阪府北部を震源とする地震では、SNSで「電車が脱線」「シマウマが脱走した」などの誤った情報が流れた。2016年の熊本地震でも、「近くの動物園からライオンが放たれた」などとのウソがツイッターで拡散。発信者が偽計業務妨害容疑で逮捕されている。

出前授業では、こうしたケースを紹介しながら正しい情報と危うい情報とを見分ける力を養うことの大切さや、様々な情報に接するときの心構えなどについてアドバイスしている。

新聞には教材が詰まっている

「初めて知った」「新鮮だった」。出前授業のあと受講生に感想を尋ねると、手ごたえのあった授業ほど、こんな答えが返ってくる。担当の先生方にお願いしている授業後のアンケートでも、好評を得た授業に共通するのは、こうした感想だ。

教科書にないことを

教室に新鮮な刺激を提供できるか。出前授業の成否は、この一点が握ると感じている。教科書には載っていないことを伝えるからこそ、子どもたちの目は輝く。

「新聞記者って、子どもたちにはヒーローのように映るんですね」。出前授業の講師を務めた記者が言った。取材活動や新聞制作の現場では当たり前のことが、児童・生徒の目には、とてつもなく新鮮に映ることは少なくない。

「新聞の読み方」は、出前授業でもっとも多く求められるテーマだ。「全部の記事を詳しく読むのはハッキリ言って無理」「見出しを頼りに、目に留まった記事をピックアップする『つまみ読み』から始めてください」。新聞は隅々まで熟読するものだと思い込んでいる児童・生徒あるいは先生方は、これだけで目を丸くする。

次いで需要の多い「新聞作り・記事の書き方」では、「一番伝えたいこと、つまり結論を先に書く」と教える。記事を書く際のイロハだが、学校で習うのは起承転結型の文章が中心で、ここでも「目からウロコが落ちる」らしい。

刺激となる素材は、読み書きの技術にとどまらない。水戸支局の川辺隆司支局長は、小学生を対象に「新聞社の連係プレー」をテーマに授業を行った。自身の支局デスク時代の経験からリーダーシップやメンバー個々の判断力の大切さを教えた。東京本社写真部の立石紀和記者は、東日本大震災で母親が行方不明となった少女への取材体験を小学6年生に紹介。新聞に掲載した写真で「家族の絆の強さや子が母を思う気持ちを伝えたかった」と語りかけた。

いずれも、「取材や新聞作りの舞台裏を初めて知った。学ぶことは多い」などと好評だった。

言い方を変えれば、新聞や新聞社は世間から見てブラックボックスなのだ。閉ざされた箱かも知れないが、中には教室で活用できる教材が詰まっている。

新聞は職種のデパート

例えば文化事業。「展覧会を開くために、海外に出かけて絵の持ち主と何年も話し合いを続ける」と簡単に紹介したことがある。子どもたちは、「そんな仕事があるのか」と、目を輝かせて聞き入っていた。

「職種のデパート」とも呼ばれる新聞社だ。編集や事業のほかに販売、広告さらには新聞作りを支える技術など、働くことの意義を教える「キャリア教育」の教材には事欠かない。先生方にはぜひ活用していただきたいし、活用の手法を一緒に開発していきたい。

岩本洋二
教育ネットワーク事務局 専門委員

インターナショナルスクールでも

東京都世田谷区内のインターナショナルスクールでは、読売新聞東京本社文化部の石田汗太編集委員（58）が新聞制作についての授業を行った。

授業は、英国の義務教育課程を採用している「ザ・ブリティッシュ・スクール・イン・トウキョウ昭和」で行われた。英国のほか、オーストラリアやニュージーランドなど様々な国の児童が通っている。

授業には日本の小学校高学年にあたる46人が参加。12グループに分かれ、各自が持ち寄った新聞記事を台紙に貼り付けてオリジナル紙面を作成した。

石田編集委員は日本語で授業を行い、「新聞を作るときには、みんなで議論して、面白かったり、重要だと思ったりした記事を大きく紹介する」と説明。それを受け、児童たちは自分たちが選んだ記事をどう扱うかを議論した。

ある児童はアメリカンフットボールの危険なタックル問題について、「誰がどのように指示をしたのかが気になる」と主張。別の児童は米朝首脳会談中止のニュースについて、「世界に大きな影響がある」と呼びかけ、それぞれのグループのメイン記事に採用された。

石田編集委員はそれぞれの新聞について、「重要なニュースがきちんと扱われている」「難しいニュースから楽しい話題まで採り上げていて、バランスがとれている」などと講評した。

参加した男子児童は「記事の重要さと紙面での大きさの関係はあまり考えたことがなかったので勉強になった」、女子児童は「みんなが持ってきた色々な記事をまとめるのは楽しかった。またやってみたい」と話していた。

出前授業で新聞制作の要点について説明する石田編集委員

驚くばかりの発想力

石田汗太
文化部　編集委員

1時間で新聞作りのワクワクを伝えたい。「新聞はチームで作るもの」というテーマに絞り込み、4人がそれぞれ記事を持ち寄り、話し合いでトップ記事を決めて壁新聞を作るゲームにしてみました。実制作時間はたった20分なのに、カラフルで個性的な紙面を組み上げる発想力には驚くばかりです。何より、日本語を母語としない子どもたちが、こんなにも日本の新聞が好きなことに、こちらが励まされます。

記者による出前授業
←お申し込みはこちら

国立大学法人化は失敗だったのか

「異見交論」アクセス好調

教育ネットワークのウェブサイトで連載中の「異見交論」が、ネットユーザーの熱い視線を浴びている。国立大学法人化の成果は何か、そもそも国立大学とは何か――などと青臭いテーマで行う有識者インタビューにもかかわらず、アクセス数はウナギ登り。内容を巡って盛んにリンクが張られ、ツイッターで議論が拡散している。

火がついたのは、山極寿一・京都大学長の回に飛び出した一言だった。「法人化は失敗だ。それを認めてもらわないと、何も進まない」。国立大学は社会の将来を担う公共財なのに、国は必要な手を差し伸べていないと難じたのだ。

国立大学は「犠牲者」？

国立大学の法人化は2004年4月。以来、14年がたつが、有力な国立大学長がマスメディアの取材に対し、明確に失敗と断じたのは初めてだった。法人化の失敗とは、つまり国の文教政策の失敗を意味する。山極学長は国立大学協会会長も務め、学者の国会とされる日本学術会議の会長でもある。どの立場であれ、発言が公になれば大きな波紋を巻き起こすのは必至であり、実際にそうなった。

間をおかずに、五神真・東京大学長に登場してもらったところ、「法人化は必然だった」と正反対の意見。踏み切っていなければ、もっとひどい状況になっていたと分析するのだ。日本を代表する大学トップの、文字通りの「異見交論」に刺激を受けたのだろう。このあたりから、アクセス数は一気に上昇した。

国の関係者の言い分はどうだろうと、次に話を聞いたのが、大学改革の司令塔である科学技術・イノベーション会議（本部長・安倍首相）の上山隆大議員。案の定、「すでに〝国立〟大学ではないと認識を」と厳しい考えを表明して、山極学長の主張に反発した。さらに、財務省の神田眞人・主計局次長は「国立大学は納税者に責任を果たせ」と追い打ちをかけ、渡海紀三朗・元文科相も、自民党教育再生実行本部の提言をまとめた立場から「定員削減で、世界と競える国立大学に」と強く迫った。

国立大学への期待の大きさと裏腹に、財界からの風当たりも強まっている。小林喜光・経済同友会代表幹事は「（国立大学側に）時代感覚がない」とさえ言い切った。

むろん、当の国立大学関係者は黙っておらず、ツイッターなどで寄せられるコメントも激しさを増す。「政策に翻弄される現場の苦労をわかっていない」「国立大学は行政改革の犠牲者だ」「なぜ読売新聞はこんな意見を堂々と載せるのか」……。

法人化で何を勝ち得たか

国立大学は法人化を押し付けられた「犠牲者」なのだろうか。

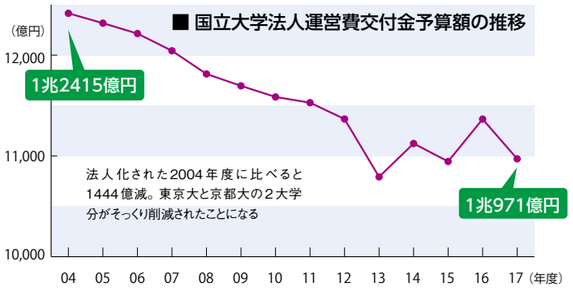
法人化の構想が明るみに出たのは、1997年1月15日の読売新聞朝刊1面の特報だった。橋本首相（当時）の直属機関「行政改革会議」が、郵政民営化などとともに国立大学の「私立大学化」も検討の俎上に載せようとしているという内容。教育改革、国際競争力の強化など様々な目標を掲げ、「民間的手法」の経営による実現を狙うと伝えた。その後、議論は小泉内閣の「聖域なき改革」に引き継がれ、最終的に「国立大学法人化」で決着した。

経営当事者が腕をふるえる法人化は、実は国立大学にとって「戦果」になるはずだった。「大学の自治」「自主自律」は明治時代以来の、国立大学人の悲願だからだ。それまでの国立大学は「文部科学省の一組織」に過ぎず、本省にお伺いを立てなければ何事も進められなかった。「自治」などありえない「末端組織」の悲哀をかみしめてきた。

「法人化」は、国立大学協会と文科省の共同作業の到達点だ。制度設計を議論した「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」の座長は、当時、国大協会長でもあった京大学長。各委員会の主査も、国立大学長が務めた。文科省に一方的に押し付けられたものではない。

残念なのは、新時代に向けた明治以来の大改革とはほとんど意識されず、小手先の対応に走ったことだ。法人化2年後の「骨太の方針」で人件費などの基礎的資金「運営費交付金」の毎年1％削減が決まると、各大学は法人化以前よりも文科省の顔色を見るようになる。そして目減りする基礎的体力を補うため、補助金つきの政策に次々に応募する風潮が広がった。下卑た表現で恐縮だが、まさに「入れ食い」。その結果、ひも付き補助事業が金太郎飴のようにどの大学にも乱立し、自主自律どころではなくなったのだ。

松本美奈　まつもと・みな
読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局専門委員。大学、道徳を中心に教育問題を取材・執筆。『特別教科道徳Q&A』『大学の実力』（いずれも共著）ほか。社会保険労務士。



関心度が決める

では、法人化で得られたものは何もないか。答えはNO。最大は「教育」だろう。

筆者は2008年から読売新聞の「大学の実力」調査を担当している。偏差値や知名度によらない大学選びをしてもらうために、全国の大学を対象に、教育の取り組み状況や、退学率・卒業率といった従来、門外不出とされていたデータも集め、紙面化してきた。2017年度調査の回答率は92％に達し、文科省の情報公開のあり方にも影響を与えている。そこに見られる現在の教育のありようは、教員研修、カリキュラム改革、欠席の目立つ学生への家庭訪問……と、涙ぐましいほどにきめ細かい。「研究だけしていればいい」といった、かつての国立大学教員の姿は影を潜めつつある。

そうした姿勢を支えているのは、学長のリーダーシップだろう。子どもの数が減り、2人に1人が大学進学を選ぶ時代に、昔のエリート教育が通じないのは明らかだ。資源の乏しい日本が国際社会で立っていくには人材育成が何より重要と、学長自らが研究室を歩き回って教員に訴え、学内を束ねていくことが可能になった大学もある。

キャンパス外からの応援も改革を支える力となる。法人化がなかなか具体的な成果を得られないのは、大学関係者以外の関心の薄さもあるのではないか。法人化のころの新聞をめくっても、関係する投書は見当たらなかった。法人化直前の国立大学授業料の値上げに、学生は反対の声すらあげていない。それから14年たっても、生徒を送り込む高校にとって、国立大学とは、法人であろうとなかろうと進学実績を上げるための道具で、しかも学費が私立大学より安い、程度の存在に過ぎないように映る。

「異見交論」は、そんな現状に広く関心を持ってもらうために企画した。京都、東京の両学長が異なる見解を示しつつ、「国立大学は公共財」という点で一致するのは、社会貢献という大義の下、変わらず難路を歩む決意の表れと受け止められる。変わりつつある国立大学を孤立させ、「犠牲者」論ばかりが跋扈する状況に追い込んではならない。百数十年かけて育んできた国立大学とは何か、大学はどうあるべきなのか、もっと議論を広げ、深めたい。日本にとって、人こそが宝物。その重要な孵卵器なのだから。

異見交論

vol.44 神田 眞人 氏
財務省主計局次長

vol.45 橋本 和仁 氏
内閣府

vol.46 小林喜光 氏
経済同友会代表幹事

vol.47 渡海 紀三朗 氏
元文科相

vol.40 山極 寿一 氏
京都大学学長

vol.41 五神 真 氏
東京大学学長

vol.42 上山 隆大 氏
総合科学技術・イノベーション会議議員

vol.43 冨山 和彦 氏
経営共創基盤 代表取締役CEO

「異見交論」は教育ネットワークHPのトップページから!

わたしたちの学校の魅力、新聞で伝えたい

東京・葛飾区立柴又小

紙面構成や見出しのつけ方、記者から学ぶ

交流先に新聞送る

葛飾区立柴又小学校（東京都）の子どもたちが、自分たちの学校の魅力を交流先の小学校に伝える新聞を作ることになり、6月26日、読売新聞の記者が児童に新聞作りについての授業を行った。

柴又小は新潟県上越市立浦川原小と、お互いに訪問したり、手紙をやり取りしたりなどの交流を続けている。今年の夏は、柴又小の4年生2クラス48人一人ひとりが、学校の素晴らしさを紹介する新聞（A5判）を作って浦川原小に送ることになった。

見出しクイズに挑戦

新聞作りの授業の講師を務めたのは、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の住吉由佳記者。家庭科室に集まった児童は、一人ひとりに配られた読売新聞朝刊を手に取りながら、1面に4、5件のニュース記事が載り、重要な順に大きな見出しの記事が割り付けられていることを学んだ。

授業のために特別に作った見出しのない紙面が正面のスクリーンに大映しされると、児童たちは「何が書いてあるかわからない」「読む気がしなくなる」などと感想を言い合った。次の画面に、見出しや写真が大きく現れると、「オーッ」と歓声が上がり、見出しと写真、イラストを割り付けて、紙面が読みやすくする工夫について体感した。

見出しをつけるコツとして、記事の大切な部分から「8～10文字ぐらい」を選ぶことを教わった後、「見出しクイズ」に挑戦。住吉記者は、映画「男はつらいよ」でも知られる帝釈天での節分の豆まきを紹介する読売新聞都内版の記事のコピーを配布。記事は見出しの部分を隠してあり、担任の松下昭夫教諭が記事を読み上げると、児童は一斉にそれぞれ見出しを考えて書き入れた。

児童たちは「節分のにぎわい」「寅さん 豆ください」「豆まき 鬼さんたちも『つらいよ』」などユニークな見出しを発表。住吉記者は「きちんと10文字以内になっていますね」「鬼さんたちも『つらいよ』は、新聞社の専門記者がつけた見出しよりもすばらしいかも」などと講評してから実際の紙面で使われた見出し「寅さんも『福はうち』」を紹介。児童たちはうなずきながら、自分が考えた見出しと比べて納得した様子だった。

分かりやすい新聞作れそう

児童は、下書きしておいた原稿を、新聞形式にまとめる作業に取り組み、「鼓笛隊パレード」「給食がおいしいこと」「生き物を飼っていること」など、交流先の浦川原小の友達に伝えたいメッセージを書き込みながら、「見出しは、どのあたりに書けばいいですか」「この見出しをどう思いますか」など次々に住吉記者に質問した。

授業を終えた児童は、「新聞の仕組みがよく分かった」「見出しの大小で記事がどのくらい大切かを示していることが理解できた」「わかりやすい新聞を作れそう」などと感想を話していた。

柴又帝釈天で行われた豆まき（3日、葛飾区柴又で）

柴又帝釈天

節分の3日、葛飾区柴又の柴又帝釈天で豆まきが行われ、参拝者計約6000人でにぎわった。

境内に設置されたステージで、赤毛と青鬼に扮した男性が「おそとうしや」と叫んで飛び出すのを合図に豆まきを開始。映画「男はつらいよ」の主人公、寅さんに扮した物まねタレント・野口寅次郎さんや、かみしも姿の関係らが「福は内」と声をかけて豆袋を投げた。参拝者は「こっち、こっち」と叫んで、豆袋をキャッチした同区金町、　ちゃん（4）は、後でママとゆっくり食べる」と笑顔で話していた。

地元の記事「帝釈天で豆まき」（2017年2月4日読売新聞都民版）を元に、記者が用意した見出しシート

見出しのつけ方について住吉記者から学ぶ子どもたち

広がるNIEの取り組み

土曜サロン90回

新聞を授業で活用するNIE（Newspaper In Education）の手法について教員らが学び合う「読売NIE土曜サロン」が6月23日、90回目を迎えた。サロンは2008年1月にスタートした。読売新聞東京本社で原則第4土曜日に開催、小・中・高校、大学でNIEに取り組む教員らが実践を持ちより、交流を深めながらスキルアップを図ってきた。

「教員の働き方改革」で講演

90回目のサロンには、教員ら21人が参加。前半は編集局教育部の中谷和義記者が、「教員の働き方改革を取材して」と題してミニ講演を行った。

中谷記者はまず、教員の負担が大きいと言われる部活動指導の見直しについて言及。外部講師が生徒の指導に当たる都内の中学校剣道部を取り上げた記事を紹介しながら、土・日曜日も試合の引率で、休みが取れない顧問のあり方に疑問を呈した。文部科学省は昨年4月、教員の負担軽減のため、教員がいなくても部活動の指導や引率ができる「部活動指導員」を制度化した。これについて中谷記者は「生徒に事故などがあった時に責任が発生するため、教員OBくらいしかなり手がいず、学校は人材を探すのに苦心している」と現状を説明した。

さらに、授業研究など教員本来のクリエイティブな仕事ではなく、保護者対応や、教育委員会の調査への回答などに忙殺されていることが、教員の負担感を高めていると指摘。ノー残業デーを設け、午後5時半以降の電話を教育委員会の担当者の携帯電話に転送する岐阜市の取り組みを紹介した。

教員の働き方改革について話す中谷記者

◇保護者の理解どう得るか

参加者からは「やったこともない運動部の顧問を任されて週末も休みが取れず、月曜からの授業が大変だった」という体験談や、「部活が好きで何とか学校に来ている子がいるのも事実。部活に熱を入れる保護者もいる」との意見も出た。

教員の働き方改革を、教師が楽をするためととらえる保護者もいるとして、中谷記者は「保護者の理解をどう得るかが一番のカギになる」と解説した。

夏休みに新聞活用

後半は秋山純子・読売新聞NIE企画デザイナーの司会で、「夏休みに新聞活用」をテーマに実践交流が行われた。参加者からは、新聞からハッピーな記事を見つけ、生徒と保護者もコメントを書き込む夏休みの課題や、修学旅行の事前学習を兼ねた「修学旅行新聞」作りなどが報告された。秋山さんは、「新聞各社の終戦の日の社説や投書欄を読み比べて感想を書くなど、平和について考えさせる課題も出せるのでは」と提案した。

90回を迎えた土曜サロンで、意見交換する参加者たち

NIE実践が「点から線」へ

1回目から参加している東京・東大和市立第十小学校の石黒文子教諭は「サロンが始まった当時、NIEに取り組む教員は少なく、自分の実践が点だと感じて不安だった。しかし、ここで仲間と交流し、実践が線でつながった気がする。記者から直接取材の裏話を聞けるのも魅力的だ」と話す。

稲城市立稲城第四中学校の岩田美紀教諭は「ハッピーニュースは取り入れてもいいかなと思った。新たな視点が得られた」と満足そうだった。

読売教育３賞
参加者・作品募集

News

■高円宮杯 第70回 全日本中学校英語弁論大会

http://www.jnsafund.org/

国際性豊かな人材の育成を目的に掲げた伝統ある大会です。自作の英語スピーチを披露して内容を競い合います。

【内容】論題は自由、制限時間は5分。地方大会は9～10月（各都道府県）、決勝予選大会は11月28、29日（東京・赤坂）、決勝大会は11月30日（東京・有楽町）。参加資格など詳細はウェブサイト参照
【表彰】1位：高円宮杯、2～7位：読売新聞社杯ほか
【副賞】三菱商事賞：上位3人
ワールド・ファミリー賞：若干名ほか
【問い合わせ】事務局　☎03・3217・8393

【主催】読売新聞社／日本学生協会基金　【後援】外務省／文部科学省／NHKほか　【協賛】三菱商事／ぺんてる／ワールド・ファミリー／ANAホールディングス／ダウ・ケミカル日本／国際ソロプチミスト東京―東／ECC

■第68回 全国小・中学校作文コンクール

https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/sakubun.html

国内の小・中学校と海外の日本人学校の児童、生徒を対象に作文を募集します。

【部門】小学校低学年、同高学年、中学校
【賞】文部科学大臣賞ほか。11月下旬、読売新聞紙上で発表
【応募規定】400字詰め原稿用紙に自筆。テーマは自由、枚数制限なし。入賞作品の著作権は主催者に帰属（作品返却なし）
【応募先】読売新聞本支社 総支局へ。9月12日（水）必着
【問い合わせ】読売新聞東京本社事業開発部
☎03・3216・8606

【主催】読売新聞社　【後援】文部科学省ほか　【協賛】JR東日本／JR東海／JR西日本／日本テレビ放送網　【協力】三菱鉛筆

■第62回 日本学生科学賞

http://event.yomiuri.co.jp/jssa/

中学・高校生のための科学自由研究コンテスト。個人でも共同でも応募できます。

【募集分野】物理、化学、生物、地学、広領域、情報・技術
【応募方法】各地方審査（9～10月）の詳細はウェブサイトの「都道府県問い合わせ」へ。情報・技術分野は９月４日（火）～１０月２８日（日）に事務局へ直接応募
【審査・発表】地方審査を通過した作品は中央審査へ。12月下旬、読売新聞紙上で発表
【賞】内閣総理大臣賞（副賞50万円）ほか。参加作品の中から、米国で開かれる「国際学生科学技術フェア」に派遣
【問い合わせ】事務局　☎03・3216・8606

【主催】読売新聞社　【共催】全日本科学教育振興委員会ほか　【後援】内閣府／文部科学省／環境省／特許庁　【協賛】旭化成

夏休み、どう過ごす？　夏休みイベント特集

夏休み、今年はどのように過ごしますか？ 海や山に出かける人、ゆっくり読書する人、じっくり自由研究に取り組む人もいることでしょう。計画を立てるときに役立ててもらうために、読売教育ネットワークのサイトで「夏休みイベント特集」を始めました。展覧会から文学コンテストまで、様々なイベントが並んでいます。どれを体験するか、ご家族で相談してみてください。　→http://kyoiku.yomiuri.co.jp/event/

■文学はキミの友達。「カクヨム甲子園」

https://kakuyomu.jp/special/entry/kakuyomukoshien

新井陽次郎氏が描いたメインビジュアル

全国の高校生から小説・エッセイを募集するコンテスト、"文学はキミの友達。「カクヨム甲子園」"を、今夏も開催します。

募集部門は前回同様、しっかりとした物語を書きたい方に向けた「ロングストーリー部門」と、短い文章量で魅せたい、または気軽にチャレンジしてみたいという方に向けた「ショートストーリー部門」の2部門です。両部門からそれぞれ「大賞1名」「奨励賞5名」「読売新聞社賞1名」「キリンレモン賞1名」が選出されます。応募点数の上限はありません。夏休みを利用してぜひ両部門に応募してください。

【応募受付期間】7月21日（土）12:00～9月10日（月）18:59
【募集部門】ロングストーリー部門：8,000文字以上、20,000文字以下の作品を募集／ショートストーリー部門：4,000文字以下の作品を募集。
【募集ジャンル】現代ドラマ／エッセイ・ノンフィクション／恋愛／ラブコメ／ミステリー／ホラー／SF／異世界ファンタジー／現代ファンタジー

【主催】株式会社KADOKAWA【後援】読売新聞社【協賛】キリンビバレッジ株式会社

■特別展「昆虫」

http://www.konchuten.jp/

国立科学博物館（東京・上野）でこの夏、昆虫をテーマとする大規模な特別展が初めて開かれます。地球上の生物種の半数以上を占めるとされ、太古の時代から厳しい環境を生き抜いてきた昆虫たちの魅力を余すところなく伝える展覧会です。

展示の中心は、日本や世界各地で採集された数々の標本たち。昆虫は、世界で確認されただけでも約100万種あり、実際はその何倍もの数が暮らしているとされています。

展覧会では数万点を紹介し、日本最大の甲虫であるヤンバルテナガコガネの新種の基準となった貴重な標本も披露。ホウセキゾウムシのように豊かな色と輝きを持つ昆虫や、琥珀（こはく）の中に閉じ込められた太古の昆虫などにも出会えます。

【会期】7月13日（金）～10月8日（月・祝）（7月17日、9月3、10、18、25日は休館）
【会場】国立科学博物館（東京・上野公園）
【観覧料】前売り一般・大学生1400円（当日1600円）、同小・中・高生500円（当日600円）
【前売り券発売中】ハローダイヤル☎03・5777・8600

海外で学ぶ・リレーエッセー㊷

米ボウディン大学 アドベンチャーだらけの教育

開成高卒、ボウディン大学（米国）1年（執筆時）
小森（こもり） 麟太郎（りんたろう） さん

討論グループの学友たちと（右）＝本人提供

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェローシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェローシップの詳細はウェブサイトへ。 http://ryu-fellow.org

英語の原文はhttp://the-japan-news.com/news/article/0004170352でお読みいただけます。

突堤の先端に立っていた
寒い風が吹き付けた
ずっと凍えていた
底知れぬ黒い淵を見た後
凍る湖に飛び込んだ
湖面を腕でたたき続けると
湖面が光りだした

この時のことを今でも生々しく思い出せる。というのも、オリエンテーションのときの最初に学んだことだったからだ。

生物発光を目撃したのはこれが初めて。それは、9月の夜、凍るように寒い湖で微生物が作り出す「生きた光」だった。天上に輝く星と「生きた光」以外、周囲は漆黒の闇。この世のものとは思えなかったが、壮観だった！ 10秒しか寒さに耐えられなかったが、全身の感覚を使っての「学び」、体の内部から沸き起こる圧倒的な興奮をこんなに感じたことはかつてなかった。

物理学とコンピューター科学を専攻する予定であり、大学生活が（波動量子力学における）シュレディンガー方程式の数的価値に没入したり、（特殊相対性理論において用いられる慣性座標系の間の座標変換）ローレンツ変換の教科書を読んだりするだけだったら、愛する家族から1万キロも離れた場所で人生での貴重な4年間を過ごそうとはまず思わなかっただろう。

ロサンゼルスや東京などの都会生活しか経験がなく、これほど多くのアドベンチャーに囲まれた荒々しい自然に囲まれた離れた町に住むチャンスはこれまでなかった。一例を挙げると、2学期のあるとき、親しい友達2、3人と私は、フリーライン・スケートの乗り方を習得した。これはスケートボードをさらに難しくしたもので、小さな車輪二つがついた小さなボード二つに、左右それぞれの足を乗せてすべるもので、全くクレージーなものだ。

だが、決して忘れてはいけない。学問に課外授業はつき物だ。私の最初の学期から、多くの時間を割いて努力したのは、コンピューター科学と物理の授業だった。宿題を仕上げるために、何度も深夜までこつこつ勉強した。「人生の意義」という哲学の授業のためのテキストを読了するためにへとへとになって三日三晩徹夜したこともあった。

全く、クレイジーにもほどがある。

休学して「ホーム」を離れよう、と決心した。昨夏は、日本コカ・コーラのIT事業部でインターンシップを行った。今はドワンゴ人工知能研究所で研究員補助として働き、（プログラミング言語を用いてプログラムのソースコードを記述する作業）コーディングの実地体験を行っている。ボウディンでの生活はあと3年ある。そして、そこでどんな学びの体験ができるか楽しみにしているのだ。

（会報編集部抄訳 The Japan News 2018年2月8日）

ボウディン大学

1794年創立の、米国メーン州ブランズウィック市に本部を持つ、全米有数のリベラルアーツ大学。卒業生に、「緋文字」で有名な作家、ナサニエル・ホーソーンら。